

整数座標によるヲコト点の記述

著者	高田 智和, 田島 孝治, 堤 智昭
雑誌名	訓点資料の構造化記述 成果報告書
ページ	71-77
発行年	2013-03-29
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告 ; 12-08
URL	http://doi.org/10.15084/00002648

整数座標によるヲコト点の記述

高田 智和 田島 孝治 堤 智昭

1 はじめに

日本語史の研究資料の一つに、訓点資料と総称される一群がある。漢籍、仏典、国書などの漢文本文に対して、日本語で理解するための訓点を加えたもので、奈良時代から近代に至るまで、各時代・各学派の特色ある訓点が施されている。これまで、日本語史研究では、文字（万葉仮名から片仮名への変遷など）、音韻（音便や日本漢字音など）、語彙・語法（漢文訓読語彙など）といった面で、訓点資料が活用されてきた。

伝存する訓点資料は、平安時代だけでも 5,000 点を超えると言われ、その大部分は仏典である。現存資料が大量にあることと、相対的に同時代の和文の一次資料が少ないこともあってか、日本語史研究での訓点資料の活用は、平安時代とそれに続く鎌倉時代を中心に行われ、室町時代以降の訓点資料が扱われることはまれである。

平安・鎌倉時代の訓点資料は、漢文による本行・割注、書写者や校訂者等による本文訂正、加点者や移点者によるヲコト点（字画の隅・内部に記された符号）、声点、仮名点など持ち、複雑で重層的な文書形式である。特にヲコト点は、現代の漢文訓読では用いられない符号であるものの、平安・鎌倉時代の訓点資料の大きな特色であり、訓点資料を読み解く上で、極めて重要なものである。

本発表は、訓点資料の解読を、原本から実際に行なおうとする立場で、ヲコト点の記述方法を検討するものである。

2 ヲコト点

ヲコト点は、漢字の字画の隅や内部に記入する記号で、形状（星点、線点、鉤点など）と位置によって、対応する音節（あるいは音節列）が異なる。また、同じ形状、同じ位置にある点であっても、ヲコト点の種類が異なれば、対応する音節も異なる。点本ごとの個別事例が多々あるため、ヲコト点の種類が幾通りあるのかは算定しづらいが、小異を含めると、現在相当数のヲコト点が報告されている。

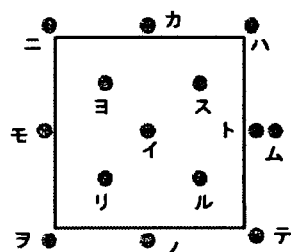


図 1：喜多院点（星点）

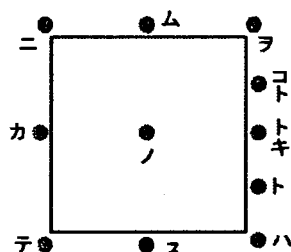


図 2：古紀伝点（星点）

図1は喜多院点、図2は古紀伝点のそれぞれ星点である。喜多院点では、左下から四隅の点は「ヲニハテ」となり、古紀伝点では同様に「テニヲハ」となる。星点の位置に対応する音節によって、ヲコト点は類別される。中田祝夫『古点本の国語学的研究』（講談社、1954年）では、点図集に記載された代表的な26種のヲコト点を8群に分類している。すなわち、第一群点、第二群点、第三群点、第四群点、第五群点、第六群点、第七群点、第八群点である。これらの類別は、ヲコト点の歴史的変遷・発達を考慮した分類であり、この枠組みは現在の訓点資料研究でも基準となっている。

ヲコト点の体系的な研究は、前述の中田祝夫『古点本の国語学的研究』を経て、築島裕『平安時代訓点本論考』（汲古書院、1996年）において、一定の到達点に達したものとみられる。築島裕『平安時代訓点本論考』では、平安時代の訓点資料を博搜し、点図集にあるヲコト点のうち未発見のものを除いて、加点者の学統を勘案して、ヲコト点の継承と発達を実証的に体系づけたものである。日本語史研究として始まったヲコト点研究が、日本語史研究の枠組みを越えていったということもできよう。

3 韓国の点吐口訣資料の解説

漢文の訓読は、日本だけの言語現象ではなく、中国の周辺民族で共通して行われていたことが知られている。ヲコト点に類似する訓読記号としては、韓国の点吐口訣がある。

点吐口訣は、2000年に小林芳規博士、西村浩子氏によって発見された。誠庵古書博物館所蔵の高麗初雕版『瑜伽師地論』巻第八に記された、角筆による点吐口訣である。その後も点吐口訣資料の発見が続いている。いずれも角筆資料である。

韓国の口訣資料研究者たちは、点吐口訣の解説にあたって、漢字を四角形に見立て、その内部と外周とを縦横に区切り、方眼紙に漢字を置くようにして、点吐口訣の位置を特定し、類型化する手法を用いていた。各方眼は数値で表現し、7×7分割の変形と、5×5分割（図3）の2種がある。現在では、5×5分割が主流のようである。

11	12	13	14	15
21	22	23	24	25
31	32	33	34	35
41	42	43	44	45
51	52	53	54	55

図3：5×5分割

5×5分割の方眼・座標、数値による表現は、当時未解説であった点吐口訣を解説するために、点吐口訣の位置を精密に記述する目的で考案されたものと解される。点図集が知られていた日本では、方眼・座標や数値表現が考案され、用いられたことはなく、解説段階でも、点を表現するのに「左下」「中央」などと呼び、対応する音節がある程度特定でき

た後は、「テの位置」「ノの位置」などと表してきた。解読目的だけでなく、解読後の電算処理を目指したとき、座標や数値表現を用いてヲコト点の位置を記述するのは、極めて有効な手法であると考えられる。

4 ヲコト点の座標表現を考える

ヲコト点を、点吐口訣のように、座標や数値で表現しようとするとき、検討しなければならないことは、次の2点である。

- (1) いくつに分割するのがよいか。
- (2) 原点をどこに設定するのがよいか。

以下、順に検討していく。

4. 1 分割数

韓国では5×5分割が現在の主流である。5×5分割で点図集のヲコト点を記述しようとする、古紀伝点の星点(図4、再掲)であれば収めることができるが、中院僧正点の星点(図5)のようなものは、うまく収まらない。方眼に星点二つを収めなくてはならない。

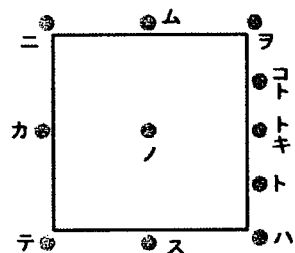


図4：古紀伝点（星点）

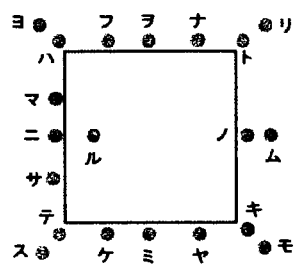


図5：中院僧正点（星点）

中院僧正点のように、漢字の四辺のさらに外側に離れて位置する点を収めるために、5×5の外周にもう1ブロックを設け、7×7分割(図6)にすることで対処する。

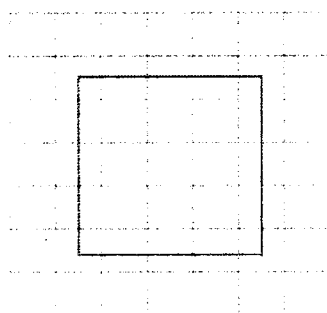


図6：7×7分割

4. 2 原点の位置

韓国の5×5分割では、各方眼に数値で名称を与え、左上が開始位置の(1,1)である。計算機で処理する場合は、(1,1)始まりよりも、(0,0)始まりの方に利便性があるため、開始位置を(0,0)とする。

以下に、原点(0,0)をどこに置き、上下、左右のどちらに軸の方向を定めるかを、ヲコト点の性質なども勘案して、検討してみることにする。ヲコト点の位置のうち、最重要の位置は漢字の四隅と中央であるため、左下原点、右上原点、左下原点、中央原点の四通りを取り上げる。

(1) 左上原点、左→右、上→下

左上を原点とし、左から右、上から下へ展開するのは、韓国の5×5分割の考え方である(図7)。総じて、漢字は左上に初画、右下に終画があることが多く、運筆の流れを表現しているようにも見える。また、左から右、上から下は、左横書きの書字方向に合致し、これは計算機の書字方向でもある。5×5分割の数値名称の割り当ては、計算機での処理も念頭に置いて設計されたものであろう。座標とし計算しやすい利点がある。

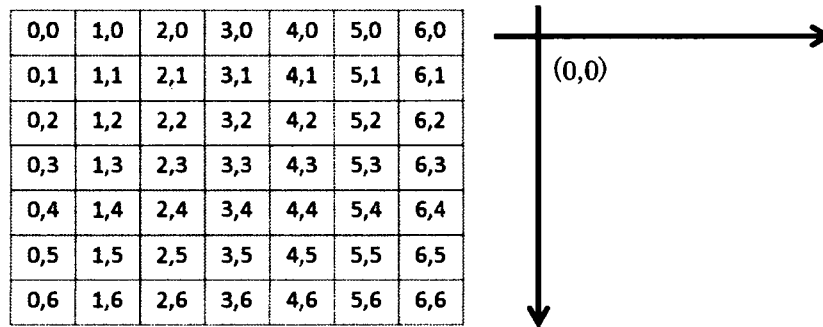


図7: 左上原点

(2) 右上原点、右→左、上→下

右上を原点とし、右から左、上から下へと展開する考え方である(図8)。これは右縦書きの書字方向に合致する。「ヲコト点」という名前は、古紀伝点の右上の星点から順に、右縦書き方向に星点をつないだことに由来する。西墓点や仁都波迦点の名称も同様に、右上の星点を始まりとして、ニ(右上)→シ(右辺中央)→ハ(右下)→カ(上辺中央)、ニ(右上)→ト(右辺中央)→ハ(右下)→カ(上辺中央)のように、星点が表す音節を右縦書き方向につないだものが、名称の由来である。

このように、右上原点は、ヲコト点の名称の由来を勘案すると、一定の合理性を見出せるものの、右から左への展開は計算機での計算時に難がある。

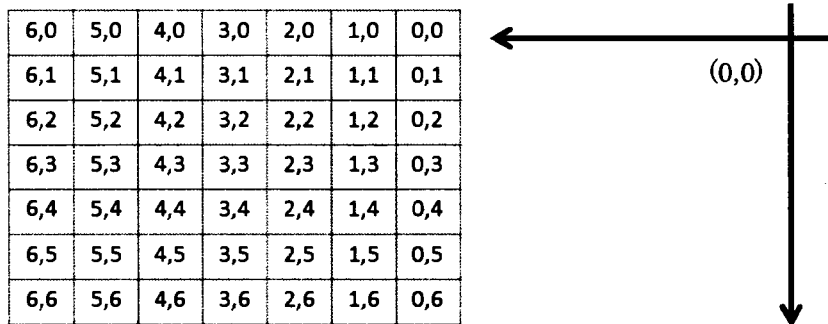


図 8 : 右上原点

(3) 左下原点、左→右、下→上

左下を原点とし、左から右、下から上へと展開する考え方である (図 9)。グラフを書くときに、通常用いられる平面である。古紀伝点の星点を、左下から時計回りに四隅をつなぐと、テ (左下) → ニ (左上) → ヲ (右上) → ハ (右下) となり、助詞・助動詞の総称である「てにをは」はこれに由来する。声調を表す四声点も、左下を始まりとして、時計回りに、平声、上声、去声、入声を配置する。

このように、左下原点も有力であるが、下→上の方向は、計算時にやや難がある。

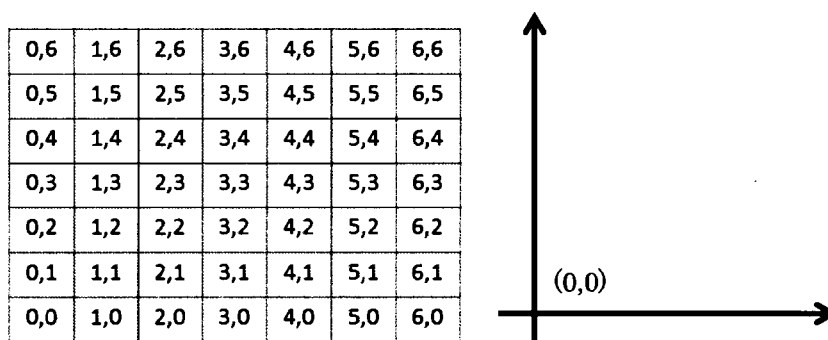


図 9 : 右上原点

(4) 原点中央、左→右、上→下

最後に、中央を原点とする考え方を検討する。中田祝夫博士によって、ヲコト点は回転し、歴史的に変遷・発達したことが指摘されている。つまり、一つのヲコト点を回転させることで、別の新しいヲコト点が発生したとする、ヲコト点のバリエーション発生に関する有力な説である。

図 10 に示すように、特殊点乙類を時計回りに 180 度転回させると第三群点となり、さらに第三群点を時計回りに 90 度転回させると第四群点となる。このように、ヲコト点を転回させることで、ヲコト点同士の関係、発生順番を考えることができる。

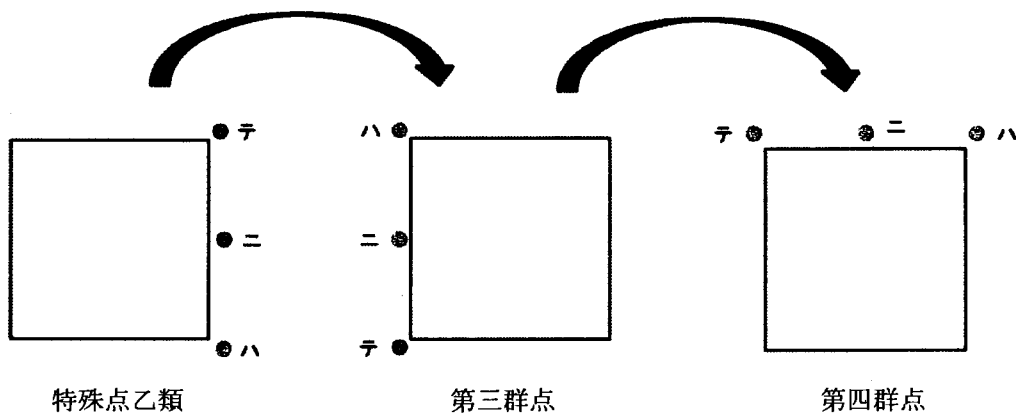


図 10：ヲコト点の転回

ヲコト点が歴史的に転回したことをふまえると、回転させやすいところに原点を置くことも利点がある。回転に便利な位置は、中央である。原点を中央に置くとして、計算機で扱いやすいベクトルの向きは、前述のように、左から右、上から下である（図 11）。

-3,-3	-2,-3	-1,-3	0,-3	1,-3	2,-3	3,-3
-3,-2	-2,-2	-1,-2	0,-2	1,-2	2,-2	3,-2
-3,-1	-2,-1	-1,-1	0,-1	1,-1	2,-1	3,-1
-3,0	-2,0	-1,0	0,0	1,0	2,0	3,0
-3,1	-2,1	-1,1	0,1	1,1	2,1	3,1
-3,2	-2,2	-1,2	0,2	1,2	2,2	3,2
-3,3	-2,3	-1,3	0,3	1,3	2,3	3,3

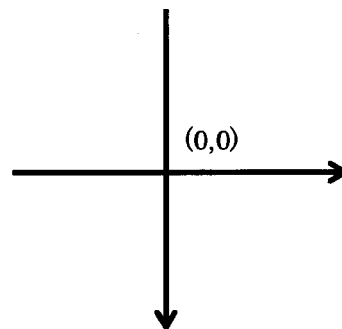


図 11：中央原点

5 おわりに

本稿では、ヲコト点の記述方法を検討した。韓国の点吐口訣資料の解読に用いられている 5 × 5 分割に着想を得て、日本のヲコト点の実情と、バリエーション発生に対する転回説に拠って、7 × 7 分割、中央原点の座標表現を提案するものである。これによって、ヲコト点の記述の精緻化が可能となり、計量研究への応用も広がるであろう。

現在、築島裕『平安時代訓点本論考』所載の主要 26 点図の座標記述を終えている。今後は、星点、線点、鉤点などの記号について、座標を動かし重ねてみることで、ヲコト点同士の詳細に検討したり、あるいは、訓点資料解読の基礎作業である移点データ作成において、座標記述を活用したりすることを考えている。

参考文献

- 中田祝夫 (1954) 『古点本の国語学的研究』 講談社
- 石塚晴通 (1993) 「中国周辺諸民族に於ける漢文の訓読」 『訓点語と訓点資料』 第 90 輯、pp.1-7
- 築島裕 (1996) 『平安時代訓点本論考』 汲古書院
- 吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸 (2001) 『訓点語辞典』 東京堂出版
- 小林芳規・西村浩子 (2001) 「韓国遺存の角筆文献調査報告」 『訓点語と訓点資料』 第 107 輯、pp.36-68
- 南豊鉉・李丞宰・尹幸舜 (2001) 「韓國의 點吐口訣에 대하여」 『訓点語と訓点資料』 第 107 輯、pp.69-126
- 庄垣内正弘 (2003) 「文献研究と言語学—ウイグル語における漢字音の再構と漢文訓読の可能性」 『言語研究』 124 号、pp.1-36
- 李丞宰外 (2005) 『角筆口訣의 解讀과 翻譯 1 —初彫大藏經의 <瑜伽師地論> 卷第五와 卷第八을 中心으로—』 太學社
- 朴鎮浩 (2011) 「文字生活史の観点から見た口訣」 『文学』 第 12 卷第 3 号、pp.169-181
- 田島孝治・堤智昭・高田智和 (2012) 「ヲコト点電子化のためのデータ構造と入力支援システムの試作」 『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 つながるデジタルアーカイブ—分野・組織・地域を越えて』、pp.211-216